

2020年 1 月26日（日）「救いの順序 ～悲慘・救い・感謝～」

ローマ3:21-24

21 しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。23 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

ハイデルベルク信仰問答より

問2 あなたが、この慰めという祝福の中に生きかつ死ぬことができるために、あなたはどれだけのことを知らねばならないのですか。

答え 三つのことであります(テス3:3-8)。第一には、私の罪と悲慘がいかに大きいかということ(ヨハネ9:41)。第二には、私が、どのようにして、すべての罪とその悲慘な結果から自由にされたかということ(ヨハネ17:1-3)。第三には、この救いに対して、私はどのような感謝を神に捧げるべきか(1ペテロ2:9-10)ということであります。

今日はハイデルベルク信仰問答の問2を扱います。問2を理解するためには、どうしても問1を振り返らなくてはなりません。問1では「あなたにとっての唯一の慰めとは何ですか」という質問が投げかけられました。「慰め」という言葉自体に説明が必要であったと思います。「慰め」とは「私たちがどんなときにも依って立つもの」「この人生で一番大切なもの」であり、キリスト者にとってそれは救い主イエス・キリストです。キリスト者とは、自分という存在を永遠に支えてくださるキリストのために生きそして死ぬ者たちなのだ。かつては自分の命を守り、自分自身に仕えることで一杯いっぱいだった私たちが、今は自由にされ、キリストに身をささげる者となった。そんなお話をいたしました。

この問2においては更に話が深まり、「**あなたが、この慰めという祝福の中に生きかつ死ぬことができるために、あなたはどれだけのことを知らねばならないのですか**」という質問に進んでいきます。言い換えるならば、キリストのために生きるうえで私たちがいつも覚えていなくてはならないことは何かということです。キリスト者が常に忘れてはならないこと、信仰の基礎としていつも心に据えておかななくてはならない原則です。その答えとして3つの内容が呈示されていますが、これらはまさにキリスト教の中核と言えるでしょう。

①人間の罪と悲慘

②罪と悲慘からの解放（救い）

③解放されたことへの感謝の生き方

まず、「知らねばならない」と言われています。「知る」とは、第一に「これまで知らなかったことを新しい知識として受け取る」ということが言えるでしょう。何かを信じるためには、「誰かから聞く」あるいは「何かで読む」必要があります。何らかの形で福音が語られなくてはなりません。そして、ここで言われている「知る」とは、ただ知識として持っておくということではなく、「神を愛する（崇める）」という目的をもって受け取られるとき、信仰に至るものとなるのです。

ジュネーヴ教会信仰問答

問6 では、神についての真の正しい知識は何ですか。

答え 神をあがめる目的で神を知るときであります。

第二に、「知る」とは「すでに知っている事柄の再確認」という側面も持っているでしょう。長く信仰生活を続けてこられた方にとっては、もう何度も聞いてきたことかもしれません。しかし、その「同じことば」は一度聞いて完結するものではなく、繰り返し聞くことによってより深く心に刻まれ、その時々によって聞き方も変わってくるものとなる。信仰の知識は深まるのです。

ハイデルベルク信仰問答が示す信仰の基礎となる3つの知識は、簡潔かつ適確に福音全体を要約しています。中心にくる「救い」は、それだけでは意味をなさず、何から救われるのかが示されなくてはなりません。それが「罪」であり、罪の結果としての「悲慘」です。①と②は分離できず、相互補完的な関係にあります。私たち人間がどういう状態にあるのかがまず開き示されなくてはならない（啓示）。創世記はなぜ天地創造の時の一糸乱れぬ世界の秩序をもって語り始めるか。それは、この世界には「本来あるべき状態」が存在することを教えるためです。そして、その状態からかけ離れた世界がここに広がっていることを読者に指し示すためです。

人に罪を説明する手段は一つではありませんが、基本的には「神からの離反」であり、自分を神とした状態と言えます。そのことを最もよく言い表した言葉が「無神論」でしょう。見えない存在への恐れなく生きるには自らを基準とする錯誤があるのです。しかし、私たち自身が知っているように、自分が定める基準というのは不確かであって、

欲望や相対的な価値観によっていくらでも揺れ動きます。そして、人が各々の基準を作り出すならば、基準と基準はぶつかり合うものとなります。

人間が「まことの神」「創造主なる神」を知らずにいる弊害が、ここで言われている「悲惨」という状態でしょう（問3では「悲惨」を「自己分裂」という観点で説明する予定です）。あらゆるものが人間の欲望によって構成されていく。神が創造された世界が本来「愛」によって構成されるべきものであったとするならば、愛の欠如は世界に悲惨をもたらすでしょう。

この「悲惨」について、今日は特に「許し」の問題からアプローチしてみたいと思います。人はこの世に生まれ落ちる限り、必ず「許し」を必要とする状況に直面するでしょう。それは、人と人との関係において罪を犯す／犯されるからです。おそらく、人間が最も早い時期に（そして深刻な意味で）直面する「許し」の問題は、親や兄弟から受ける傷に対するものだと思います。家族という最も小さな社会単位の中で、愛情不足、虐待、言葉の暴力、愛情の履き違い、誤解、無理解といったことが起こる。そして、そこで受ける心の傷は、その人の人格形成に甚大な影響を及ぼします。引きずり続ける傷によって心は病んでいく。許せたらどんなに楽だろうかと思いつつ、許せないところで苦しむのです。その傷がマグマのようになり、何かがそれにふれるとき、怒りとなって内外へ噴出する。子ども・大人を問わず、社会生活の中で傷は広がりをもつようになります。

私自身も傷を受け／与え、また多くの人が同じように苦しんでいるのを見てきました。許したいと思うが、なかなかそれができない。許せたと思っていたことが、まだ自分の心の奥底に居座っているのを知ることもあります。心の病んだ人間が形成する社会、それが私たちの生きている世界ではないでしょうか。

しかし、神はこの世界に「まことの赦し」を送り込んでくださいました。主イエスは人間が誰もなし得なかったことを十字架上で成し遂げてくださったのです。主イエスは憎しみに対して憎しみをもって返すことをせず、やられてもやり返さず、ご自分を嘲り十字架に架けた者たちのために祈りました。「彼らの罪をお赦しください」と父なる神様に願いました。主イエスがなさったこととは何だったのでしょうか。それは、怒りの根っこを断ち切ることでした。

主イエスは二重の意味で怒りの根を断ち切られた。第一に、神の人類の罪に対する怒りです。神を神とせず、神を愛さず、神の目的を行なわない人類に対する怒り、そこに待ち受ける審きを断ち切りました。主イエスのご自分のいのちを代価に、神の怒りを人類からご自分へと向け直させてくださったのです。主イエスにあって、もはや神の怒り

は私たちに向けられてはいません。

第二に、主イエスは人と人との関係における怒りをも断ち切ってくださいました。怒り、憎しみに餌を与えず、かえって愛することによって、憎しみの根を断たれたのです。怒りは細胞のように、そこに餌を与えると増大します。細胞分裂を起こし、あちこちに飛び火するものです。しかし、主イエスは一切餌を与えずに憎しみを殺してしまわれたのです。人類が誰もなし得なかったことを主はなさった。

私たちは自分には人の罪を許す力があると思ってこなかったでしょうか。私はかつて、憎い相手を許そう許そうと努力しました。神の御言葉に従ってそのように努めたのです。しかし、それはできませんでした。許せない自分に絶望し、苦しみに苦しみが増し加わりました。しかし、私はある日、一人の人の助言によって、自分が人を許せない人間であることを受け入れることができたのです。自分が罪と悲慘の中にいること、この人格は全的に墮落しており、許す力を失った存在であることを受け入れられたのです。そして、このような私のために、いえ、このような私だからこそ、主イエスは十字架上で「まことの赦し」を貫徹してくださったことを知りました。自分では罪をどうにもできないことを認めるとき、人は自由になるのです。そこにキリストの救いが現れるからです。

問2の第3の答えは、救いにあずかった人間に与えられていく新しい人生について教えています。「この救いに対して、私はどのような感謝を神に捧げるべきか」。これは、罪の縄目から解放された人が、自由に自由を加えられていくことを経験する喜びと感謝について語っています。言い方を変えるならば、キリストの弟子として生きる、肩の荷が軽い人生です。「許し」という観点で言うならば、許せない自分を知ったことにより、そこにキリストの赦しが介入するようになるのです。もう自分の力で許そう許そうと頑張らなくてもよくなったのであり、怒りを主にお渡しすることができるようになった。復讐は主のものとなり、すべてを正しく判断なさる主がふさわしい審きを行なってくださるところに、私たちの思いの一切をお委ねすることができるようになったのです。このようにして、憎しみの連鎖は主イエスの十字架が打ち込まれることによって断ち切られる。それだけではなく、主イエスは私たちの過去の傷にもやさしく御手を伸べ、慰めを与えてくださいます。

キリスト者の人生は、このように慰めを受け続ける人生なのです。そして、そのように慰めを受けている人は、その慰めが外に溢れ出し、苦しむ隣人にも慰めを与える存在となっていく。傷だらけの世界に神の慰めをもたらす器とされていくのです。

今日はハイデルベルク信仰問答の問2から語らせていただきました。「悲慘・救い・

感謝」この順序は常に心に留められなくてはなりません。なぜなら、罪の認識なき救いは存在せず、救いなき感謝も存在しないからです。罪の認識なく救いばかりが強調されるならば、実体のない喜びとなるでしょう。救いなき（感謝の）業は律法となって再び私たちを苦しめることになるでしょう。私たちの信仰生活のどこかがバランスを欠いているならば、この順序が入れ替わっているか、どれかが忘れられているからかもしれません。この原則を心に留めて歩んでいきたいと思います。

### 【祈り】

慰め主なる神よ。私たちは慰めを必要としている存在です。この人生は多くの傷を受ける場所です。また、多くの傷をもたらしてしまう場所でもあります。しかし、主イエスはこの人生にご介入くださいました。もう一人の助け主としての御霊を送ってくださいました。この方によってもたらされる慰めに満ち溢れ、またそれを与える者とならせてください。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
神なき人生を歩む者に、その悲惨な現実を示し給う、父なる神の愛、  
己が罪を知れる者に、直ちに救いをもたらし給う、主イエス・キリストの恵み、  
救いにあずかった者を感謝で満たし、この地に慰めを与える器となし給う、聖霊の親しき交わりが、  
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。